西洋画科

（平常成績油画）窪田喜作「夏の夕」、矢崎千代治「夏」、紫崎恒信「秋の夕」

彫刻科

（卒業製作木彫）長愛之「少女鶏を愛す」、船井登久太郎「老爺」、前島交吉「汐干狩」

図案科

（平常成績）千頭庸哉外四人「蒔絵文台下図五種」、小檜山右近外四人「笠翁式書棚下図五種」、（卒業製作）吉田衡「建築図案」、松長長三郎「同上」、大槻才吉「同上」

彫金科

（卒業製作）山本正三郎「打出し人物円額」、海野豊三郎「出山釈迦立像」、滝本友太郎「江の島夜景額図」

鍛金科

（卒業制作）山下英夫「象置香炉」、石田英一「群兎置物」、曽根鋭「仙盞瓶」

鋳金科

明治二十五年六月東京美術学校製作「着色標本」十二点、（研究製作）桜岡三四郎「聖観音」、（卒業製作）津田信夫「婦人愁思の状」

漆工科

（卒業製作）蒔田実「螺鈿秋草蒔絵紙箱」、沢木彦門「江辺に千鳥蒔絵茶箱」、三村耕三「松風蒔絵澡豆箱〔洗粉〕」、前川佐一「風前に秋草蒔絵手箱」、藤岡金吾「龍田川蒔絵硯箱」

（明治四十四年火災焼残り書類「自明治三十三年一月 至同三十四年十二月 私立学校、会社 諸会等 往復書類」による）。

なお、右引用書類には作品の寸法、価格、製作年、作品解説等、細かい記載があるが、ここでは割愛する。

⑨ パレット倶楽部

明治三十三年二月二十二日付『二六新報』に次の記事が載っている。

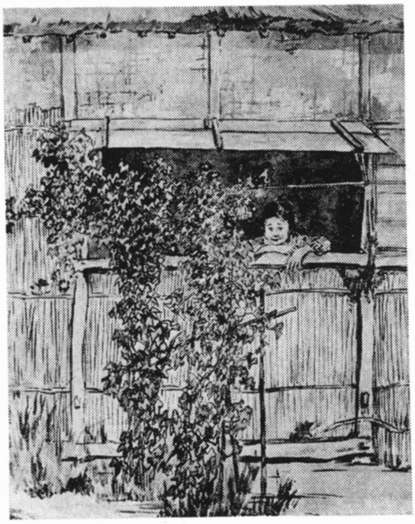
○パレット倶樂部　東京美術學校西洋畫科在學生竝に卒業生及び同校西洋畫關係者は此度パレット(調色板の意)倶樂部なるものを組織し技藝家の德義及び品行上の制裁は勿論技術の錬磨を旨とし相互の親密を計らん爲め毎月一回づゝ會合し三ケ月毎に製作品を集めて之を鑑評し優等者へは金員を贈與する仕組にて去る土曜日其第一會を某所に催し規約を定めたる後豫て調製し置きたる美麗なる名簿へ各々自署して散會せりと　誠に同倶樂部の如きは技術家にとりて最も有益なるものなるべし

⑩ 无声会

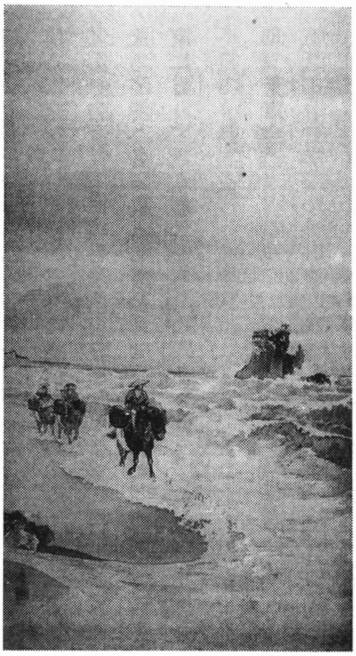
明治三十三年三月、川端玉章門下だった若手画家たちが无声会を結成した。会員は福井江亭、島崎柳塢、渡辺香涯（明治三十年本校卒）、結城素明(同)、大森敬堂(同三十二年本校卒)、平福百穂(同)ら少数であったがのちに石井柏亭も加わり、本年三月の第一回展以降大

正二年自然解散するまで計十三回展覧会を開いた。同会は「会規」に「一　本会は自然主義を綱領とす」と記し、日本美術院・日本絵画協会の理想主義ないしは浪漫主義に対抗して自然主義を標榜した。この自然主義とは「常山風水」すなわちありふれた自然の興趣をとらえて描くことであり、また、西洋画の写実的表現法をとり入

『無声会加多呂具』より　表紙
（明治33年11月22日発行）



結城素明筆　朝皃〔皃〕



平福百穂筆　雄鹿半島

福井江亭筆　雨後

れて日本画の旧套を打破することであった（「无声会かたろぐ序」大村西崖）。日本画革新の道をこうした方向に向けて切り開こうとした人に小坂象堂があったが、无声会はさらにそれを発展させようとしたのである。会の中心となったのは素明と百穂で、彼らは本校日本画科を卒業したのちさらに西洋画科に入ってデッサンを学び、玉章に学んだ円山派写生画法から脱却して行った。中でも百穂は、素明が漫画風の軽い作を多く出品するようになって行ったのに対して生真面白な態度で写生の研究につとめ、率直に対象を描いた。彼は本校の卒業制作に「田舎嫁入」と題する題材、空間表現、筆法ともに抜きんでて新鮮な作品を制作してその才腕と自然主義的な方向性を早くから示していた。

　无声会は大村西崖や平子鐸嶺（日本画科より西洋画科へ転科し明治三十四年卒業）の強力な支持もあって暫く盛況を続けた。この頃、西崖は日本美術院の横山大観、菱田春草らのいわゆる朦朧体画風を徹底的に非難する一方で无声会や彫塑会の自然主義ないし写生主義を称賛し、新聞紙上に盛んな論評を展開した。しかし、无声会は第五、六回展（明治三十五、六年）を過ぎた頃になると、その自然主義の旗幟が次第に不明瞭になり、活動も下火となった。

⑪　学生生活

図案科想ひ出　　小場恒吉

〔中略〕

　予の美校に入學したのは明治三十一年の九月だつたと思ふ。田舎の中學を出た許りで西も東も判らない。況して圖案科などいふ存在を知る由もなく、眞直ぐに日本畫科を志願した。當時應募者は定員に満たなかつたものか、出願期限後であつたに拘らず受理され、山水か何んかの新案をかゝされ、夫れが無事通過したのであつた。此時の校長は岡倉〔覚三〕校長の後を受けて彌縫的に任命された女高師校長高嶺秀夫氏の兼務であつた。有名な美校騒動の鎮静直後であり、冠袍の制服が廢され今日の様な平凡な洋服制になつた時であつたので、恰も維新の際廢刀令が出ても刀に未練があつた様に上級生等には猶袍服登校者が多く、却て我々新入生を羨ませたものである。諸先生は几帳の紫紐を肩から斜に腋下に掛けそこに何となく美校といふ特異性の趣を表示して居た。

　予は直援岡倉校長を知らないが、當時高等工業學校長は手島精一氏であり、藏前に手島、上野に岡倉ありと學界の雙璧として光つて居た。岡倉校長の美術學校に對する泡〔抱〕負經綸は、熱烈にして非凡、教官生徒を打つて一丸とし、互に心服し合つて生死を共にするの親みがあつた。されば其門方より諸大家の輩出したことは當然であつて、人々のよく知る所である。實技の教官は勿論であるが、學科の方にも一流の學者を招聘して教壇に立たせられたが、明治三十一年當時にも猶そのなごりとして、黒川眞頼・小杉榲邨・森鷗外・本田種竹・今泉雄作等の諸先生が居殘つて居られた。

　黒川先生は日本歷史の老大家であり、兼々藝術史の權威者として特に奈良朝の歷史は出色のものであつた。いつも机上に藥瓶を置いて時々飲んで居られたので、一同を不思議がらせてゐたが、或生徒がそれを一口失敬したら砂糖水であつたといふ笑話もあ